

澁澤龍彦の幻想文学アンソロジーと幻想小説の総合的研究

劉，佳寧

<https://hdl.handle.net/2324/7363897>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（学術），課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 劉 佳寧

論 文 名 : 澁澤龍彦の幻想文学アンソロジーと幻想小説の総合的研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、さまざまな幻想文学アンソロジーを手掛けた澁澤龍彦(1928-1987)の「アンソロジスト」としての側面に光を当て、澁澤龍彦の編集方針、幻想文学に関する理解、日本幻想文学というジャンルの形成に「選集」が如何に関与したかを明らかにするものである。

論文編は全三部から成る。第一部においては、日本幻想文学の草創期である1970年代の初頭に澁澤が手掛けた幻想文学アンソロジー『暗黒のメルヘン』『変身のロマン』『幻妖 日本文学における美と情念の流れ』の三冊を取り上げ、澁澤龍彦蔵書目録と照らし合わせて作品選定・編集の過程を検討した。従来、作家全集と比べて未完のものと思われる「選集」こそが「日本幻想文学」というジャンルの成立と普及に深く関わったという展開の見通しを示した。第一章では、最初の日本幻想文学アンソロジーと言われる『暗黒のメルヘン』(立風書房、1971)をめぐるさまざまな言説を取り上げ、当時の「幻想小説」という概念は雑誌『新青年』の作家たちが書いた作品を指すものであることを示した。澁澤はブルトンの『黒いユーモア選集』、当時の国内外の新しい幻想文学論を参照にしながら、第14次『新思潮』の作家だった椿實、吉行淳之介、並びに泉鏡花、石川淳、安部公房ら純文学作家の作品を「幻想文学」として定義することで、ジャンル自体を広めたことを検証した。いままでも未知の作家であった山本修雄の経歴を新資料とともに提示した。第二章では、テーマ別の選集『変身のロマン』(立風書房、1972)を編んだ澁澤が、変身譚を書く幻想作家に変貌する過程を辿る。澁澤は日本のシュルレアリスム文学史に残る変身文学を神話、東洋古典、西洋の変身小説と接続し、変身物語に「芸術家小説」のテーマを抽出した。「変身」を単なる事実や隠喩として描くだけでなく、変身の方法、ディテールを伴う変身が描かれることが澁澤における変身譚の特徴であることを論証した。第三章では、日本最初の幻想文学通史的なアンソロジー『幻妖 日本文学における美と情念の流れ』(現代思潮社、1972)を取り上げる。まずは、東雅夫が日本幻想文学の二つのキーワードの一つとして定義する「幻妖」の語源と語彙を明らかにした。『幻妖』が編まれた頃はちょうど

澁澤が日本の古典を集中的に読みはじめた頃にあたり、作品選定に偏りがあることは認めざるを得ないが、民俗学資料とフィクション、実話と怪談といった枠を取り払った『幻妖』は、日本幻想文学通史の出現を予感させる、画期的なアンソロジーであった。

第二部においては、日本幻想文学の全盛期である 1970 年代の終わりの頃、1980 年代に編まれた『世界幻想名作集』と『澁澤龍彦コレクション』全三巻を取り上げる。時代は大衆化社会へと転換しつつあった中、エンターテインメントか、主流かといった転向期に向かう幻想文学についての澁澤龍彦の考えを浮き彫りにする。第四章では、世界文学社の「世界文学全集」の一冊として刊行された『世界幻想名作集』(1979)を扱う。翻訳者(翻案者)の選定から、訳文における文体の幻想色を重視している編集者・澁澤の工夫が垣間見える。時代を悠然と超えるような企画を次々と実現させた澁澤が、1970 年代の終わりの頃に、なぜオーソドックスなセレクトで『世界幻想名作集』を編んだのか。その背後には、エンターテインメントの路線か、それとも主流(純文学)に近づくかといった問題が顕在化する。1980 年代の澁澤にはすでに幻想文学をサブカルチャーの新ジャンルとする意図がなく、むしろジャンルの解体、主流への回帰に向かって『世界幻想名作集』を編纂した。第五章では、『澁澤龍彦コレクション』全三巻を扱う。1980 年代は短文集、博物誌が盛りを迎えた時代であり、博物館・美術館の新設ラッシュの時代でもあった。そこに標本陳列室と詞華集の特質を併せ持つ『澁澤龍彦コレクション』が刊行できる土台が準備された。実証的研究を通して、『澁澤龍彦コレクション』がボルヘスが編んだ同じテーマのアンソロジーのセレクションを参照したことを明確にした。幻想作家のライバル意識がありながらも、「引用」、「蒐集」趣味をやめないアンソロジスト・澁澤龍彦の姿勢に、オリジナリティよりも「編集」という新たな創造性を重視するという資質が読み取れる。

第三部においては、澁澤龍彦の初期小説「マドンナの真珠」と晩年の幻想小説「鳥と少女」「避雷針屋」を取り上げ、今までシュルレアリスムのコラージュという手法で分析された澁澤龍彦の幻想小説を、現代の「編集」という行為の所産で読み解くという新しい研究視角をも提示した。